

第二回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

上山 安敏 著『フロイトとユング—精神分析運動とヨーロッパ知識社会』
(1989年8月29日 岩波書店 刊)

上山 安敏 うえやま やすとし 大正14年(1925)生まれ。兵庫県出身。専攻は、西洋法制史。京都大学法学部卒業。奈良産業大学教授(受賞時)。現在は京都大学名誉教授。著書は、『憲法社会史』、『神話と科学』、『世紀末ドイツの若者』、『魔女とキリスト教』、『科学と宗教』、他がある。

受賞のことば

私が和辻哲郎文化賞を受賞したのは平成二年で、二回目であった。私の出身が山崎町(現宍粟市)であり、姫路市の近傍であったため、同窓会の諸君が会場に集まってくれたのが励みになった。選考過程の発表をして戴いた湯浅泰雄先生は今は亡く、とくに畏敬していた学者ただだけに、寂寛の感に浸っている。それに受賞式では和辻哲郎の御子息の夫人が晩年の父を語られるのを拝聴した。書齋人和辻の執筆の姿に触れるエピソードに受けた強い印象は今だに焼き付いている。しかし肝心の、自分が壇上で何を述べたのかについては、記憶がない。十九年の時間が引き起した記憶のパラドックスだろう。

※本誌の為に執筆

《選考委員評》

勝部 真長

かつてウィーン大学を訪れた時、その正面内庭の廊下に並んでいた諸教授たちの胸像のなかに、フロイトの胸像だけが、たしかProf.の肩書でなくて、ただDr.となっていたのを、おかしいなと思ったことを記憶しているが、今度、この本を読んでみて初めてそのわけが分った。フロイトは、十二年間も神経学の私講師をつとめて、神経病理学の助教授になったのは四一歳のときであった。一九〇二年に教授になったが、それは員外教授であって、正教授にはついになれなかったそうであるから、彼だけは別格に扱われていたのであろう。

精神分析という新しい学問が、医学部のなかで認知され、学問として市民権をうるまでには、容易ならざる苦難の道を歩まねばならなかったことが、この書には生き生きと描き出されている。

フロイトの教授昇任のための業績として認められたのは神経症研究のみであって、精神分析の仕事—夢解釈やリビド—理論—は、うさん臭い、非科学的なものとなされていたのである。

世紀末のウィーンで、ヘルマン・バール、ホーフマンスタールやフリートリヒ・エックシュタインらフロイトの友人たちが、カフェ・グリエンシュタイルに集っては談論風発していた模様を初めとして、文学・医学・物理学その他あらゆる学際的な知的交流のなかで、フロイトの学問も育っていったのであることが、この本を通してよく分る。およそヨーロッパの学問、知識社会の雰囲気というものが、ユダヤ教の伝統や悪魔学をも含めて、多層的・多様な相互依存の複雑な構造をなしていることを、あらためて知らされるのである。

チューリッヒ的知的風土から出てきたユングと五年間の交流のあとで断絶するのも、フロイトのウィーン的風土との違いが考えられるが、このいきさつをも含めて「宗教と科学の間」が問われている。最近、こんな面白い本は、稀であると思う。

湯浅 泰雄

今回は多くの力作が寄せられたので、審査には頭を悩ませた。最終選考に残った五点は内容も多様で、簡単に甲乙をつけがたいものがあったが、最終的に上山安敏氏の『フロイトとユング—精神分析運動とヨーロッパ知識社会』を受賞作品に決定した。

フロイトとユングによって開拓された精神分析（ないし深層心理学）は、心理学や精神医学ばかりでなく、今日では、宗教・哲学・文学等から人類学・生物学・医学、あるいは社会科学や自然科学の領域まで及ぶような影響力をもつに至っている。このことは偶然ではなく、彼らの仕事はもともと、二〇世紀前半のヨーロッパの学問の諸分野における多様な発展や、当時のさまざまな思想的文化的運動と深い関係をもちながら進められたものであった。上山氏はこの二人を中心にして、当時のヨーロッパ（およびアメリカ）の諸学の動向、学者間のつながりや影響関係などをくわしく追求している。そこには、専門のワクをこえて、文学・神話学・遺伝学・人類学・社会科学などの多彩な知識人社会の交流のさまが生き生きと再現されている。また、ヨーロッパのユダヤ人社会の動向から進化論やマッハ主義の影響、一元論同盟、催眠術からスピリチュアリズムに至る当時の複雑な思想的動向の流れが、マンダラでもみるように多彩に描き出されている。このように広い視野に立ってフロイトとユングの仕事について考察した研究は、日本で初めてであるばかりでなく、西洋諸国の研究にも例がない。二〇世紀ヨーロッパの思想史的研究という観点からみても興味つきないものがある。選者一同、このようにすぐれた著作を受賞作として推薦できたことを喜びとする次第である。

坂部 恵

フロイトとユングという、人間の無意識の広大な領域にはじめて本格的な探りを入れた今世紀思想の二巨匠については、従来、個別的にあるいは二人を比較して、多くのすぐれた評伝が出され、また研究が積み重ねられて来た。とはいえ、一方で、教祖的な魅惑に富み、今日なお多くの信奉者をもつこの二人を、ほどよい距離をとりつつ、同時代の文化と学問の状況の全体のなかに位置づけて考察することは、容易になしうることではない。なまじな学問性の要求など、たちまちに底が割れてしまうほどの、人間の心性と人類史の深みに根ざした徹底性を、二人の思索がそなえているからである。

同時代の文化状況への驚くべく広い目くばりと、社会学者としての冷静的確な観察眼をあわせて生かしながら、上山氏は、とらわれのない堂に入った手つきで、この二巨人をいわば同時代の文化状況、学問状況のうちに積分してみせる。そこでは、たとえば、①当時のユダヤ人への啓蒙的同化主義とハシディズムの対立とフロイトの思考との微妙な位置関係、②ヘルムホルツの還元主義、マッハ、ケルゼンらの経験主義、シャルコー、ジャネらフランスのホーリズムといった、医学から精神科学までにおよぶ方法論また学問観の根幹におけるさまざまな対立と、フロイト、ユングそれぞれのかかわり、③フロイトの都会風とユングの土着風の対比、とくにユングのアメリカ新大陸文化への親近、④人類学でのイギリス、ドイツの学風の対立とそれへのフロイト、ユングのかかわり、等々、今日の文化と学問の問題状況に直結する数々のテーマについて、つぎつぎにまことに目の覚めるようにあざやかな見通しが展開される。世界的に見ても、これだけの広い視野と的確な見識をそなえた研究は、まずめったに見られまい。遠からず今世紀の日本における思想史研究の記念碑的著作のひとつに数えられるであろうことをわたくしは疑わない。